

なんでも アナリストの つぶやき

それでも金本位制への回帰は あり得ない

森田アソシエイツ 代表
ワールド ゴールド カウンシル 顧問
埼玉学園大学大学院 客員教授
森田隆大

2006年まで連邦準備制度理事会議長を務めたグリーンズパン氏は、なかなか好転するきっかけをつかめない世界経済や各国の財政状況に対する解決策として、金本位制への回帰を提案している。彼は、1870年から1913年まで、金本位制のもと、米国は健全な経済黄金期を築いたことを再認識すべきだと主張している。

また、米国共和党の大統領候補であるドナルド・トランプ及びその最大のライバルであったテッド・クルーズ上院議員は、金本位制への回帰は米国経済を良くすると選挙運動中に度々発言している。

実際、米国共和党の選挙プラットフォーム（政治信念・方向性）にも、間接的な表現ながら、金本位制に回帰すべきかどうかを研究・調査する委員会を立ち上げるとうたわれている。他に多くの政治家やエコノミストが、最善の策ではないにしろ、金本

位制への回帰を議論に乗せるべきだとのコメントを出している。

背景にあるのは、非伝統的な金融政策の行き詰まりに対する懸念である。しかしながら、一部の論者を除いて、厳密な金本位制に戻るのは実際には困難だと考えられている。

ではなぜそのような主張をあえてするのか？ 中央銀行に新しい規律を導入して、金融政策運営の行き過ぎを避ける必要があると考えられているからであり、現在の金融政策に対する根本的な否定ではない。これは、英国のEUからの離脱や米国大統領選挙戦におけるトランプ旋風が、グローバルリズムや資本主義への本質的な否定につながる

と捉えるべきでないのと同様である。共通することは、行き過ぎた経済システム・金融政策運用への抑制がある程度必要であるという考え方である。ではなぜ、金本位制への回帰

は極めて困難なのか？ そもそも、現代の通貨市場規模に対応できるほど、金の量は存在しない。地上に存在している金は、18・7万トンほどしかなく、現在の価格（\$1350/oz）で計算すると、約8・6兆米ドルの価値しかない。仮に現在発行されている米ドルの裏付けとして、米連銀が保有している金（8133・5トン）を充てた場合、理論上の金価格は\$6万/oz以上となる試算がある。現実的でないのは明らかである。

また、悪化する財政状況の中、現在の通貨制度によってレバレッジ成長を遂げた経済を急に無借金運営（金本位制）に切り替えるのは無理がある。金本位制の善しあしより、導入条件が揃っていないのである。しかしながら、金本位制は経済システム・金融政策をより健全化するための議論のたたき台として有意義である。時代がそれを求めているのではないだろうか？

もりた・たかひろ

森田アソシエイツ代表。ファースト・シカゴ銀行を経て、1990年にムーディーズに入社。格付委員会議長、事業会社格付部門責任者を歴任。2016年よりワールド ゴールド カウンシル顧問。著書に『格付けの深層』など。埼玉学園大学大学院客員教授を兼任。